

ある日突然この星にやってきた暗殺者、暴虐のアゼンダ。

そんな彼女に囚として目をつけられた私は、
いつの間にか意識を乗っ取られ、大切な友達である
ヤミさんを苦しめた。



最終的にはリトやモモさんのおかげもあって、
無事にピンチを乗り越えることができ、

私とヤミさんはそれまで以上にお互いのことを
大事に思うようになって、めでたしめでたし。

それが、私以外のみんなが思っている事件の顛末。

でもあのととき私の中に芽生えたのは、
ヤミさんと私の確かな絆だけじゃない。

誰にも言えない、嫌な色の感情……。



あのととき私は、確かにあの暗殺者に操られて
結果としてヤミさんをひどい目に遭わせてしまった。

事実その当時の記憶も曖昧だし、
助けてくれたリトたちにもそう伝えた。

ただと曖昧というのは、
まったく覚えていないというわけではない。

うすぼんやりとする意識の中で、
私は、私に責められるヤミさんを眺めていた。



私にどんなひどいことをされても、
自分の命が危険にさらされても、
私のために無抵抗を貫くヤミさんを…。

そして私は、そんな彼女を見ながら――

ほんの少し、興奮していた。



ポロポロ

はい

美柑、こんにちは

あ、ヤミさん。いらっしゃい

暑かったですよ？ 早く入って

はい、お邪魔します。



それからヤミさんは
私の家によく遊びに来るようになった。

あんなことがあったから、私のことを心配してくれているんだと、
リトやモモさんは言っていた。

どちらにせよ、あの不愛想だったヤミさんが
私に歩み寄ってくれたのはいい傾向だということ、最近では
私たちに気を使ってみんな帰るのを遅くしてくれている。

必然的に私とヤミさんは色々な話を
二人でするようになり、仲も前よりさらに良くなった。



だけど私は何となく気づいていた。

ヤミさんが私に会いに来るのは、
ただ私のことを心配しているからってだけじゃない…。

だってヤミさんがいつも私に向ける視線は…。



ふー、なんか本当に暑いね。

はい、もう春も終わりのようですし

そうだ、アイス食べよう？ ヤミさんの分もあるよ

ありがとうございます。美柑

ん、やっぱりこのアイス美味しい

！ 美柑……あの……

ん？ なあに？

あ、いえ……

そういえば聞いてよ、この前リトがね――

……

フ
ッ
ッ
ア
……

(あーあ、見てる見てる)

(ヤミさん、覗くんならもう少しバレないようにしないと。少し見て、目を逸らして…でもまたすぐ吸い寄せられるように視線が戻ってくる)

ニヤ
ニヤ

(私の話なんて全然聞いてないし、でも指摘したら意識してるのがバレちゃうから、何も言えないで…私の汗でちよつと透けたあそこ凝視して……)

ねえ、今の話ヤミさんはどう思う??



え？ あ、いえ…その、えっと……

ヤミさん、もしかして私の言ったこと聞いてなかった？

い、いえそういうわけでは……
あ、と…結城リトの…はなし…ですよね？

……「めんね、私の話つまらなかったよね

!? 違うんです美柑、ちよっとぼーっとしていただけで

あーあ、ヤミさんてばこんな动摇しちゃって…

しかもちよっと涙目になってるし……

あたふたと慌てるヤミさんを前に、わかりやすく落ち込んで見せる。

ヤミさんは、私のことを唯一心を許せる相手だと思っている節がある。

そして多分、ヤミさんが兵器として

生きてきた過去を忘れられる扱ひ所のようなものだとも。

だからヤミさんは、私を傷つけて自分が嫌われてしまうことを
極端に恐れている。



あ、そうだ……私今日の夕飯の買い出しに行かないといけないんだ……。

それなら私も一緒に行きます！

ううん、ヤミさんは部屋で待っていてくれる？ 外は暑いし……

あと、もしも荷物が来たら受け取っておいてほしいから

……わかりました。美柑がそう言うなら



さっきのことを気にして、
ヤミさんがそれ以上食い下がるようなことはなかった。

もちろんこれも予想通り……。ヤミさんの行動はすごく単純だ。

ただ私に嫌われたくない。それだけ。

だから、それさえ念頭においておけば、
ヤミさんの行動を操ることは簡単だった。

そして今日は随分前から温めてきた計画を実行に移す日。



はあ……

またやってしまった……どうして私はこんなんだろう……
美柑がせっかく色々話をしてくれていたのに……

きつと、美柑を怒らせてしまった……

とにかく、美柑が帰ってくるまで大人しくしていよう……



結城美柑、私のターゲットの妹で、それと同時に私の友人で私の心を救ってくれた恩人で…そして私のなにより大切な人…。

しかし私の中に眠る彼女への想いは…友情というにはあまりにも重く、ドロドロとしたものだった。



学校にいても自分の部屋にいても、いつも考えるのは美柑のこと。

いつも彼女と一緒にいられる結城リトにさえ、醜い嫉妬を抱いてしまう。

そんなひどく汚いもの……

本当に、最低だ……こんな的美柑に知られでもしたら……



何度目かのため息をついて辺りを見渡す。
美柑のにおいがする……彼女の部屋……

何の気なしにベッドの上を見ると、
そこには乱雑に脱ぎ捨てられた美柑の寝間着があった。

美柑らしくないですね。
朝、学校に行く前にバタバタしていたのでしょうか？

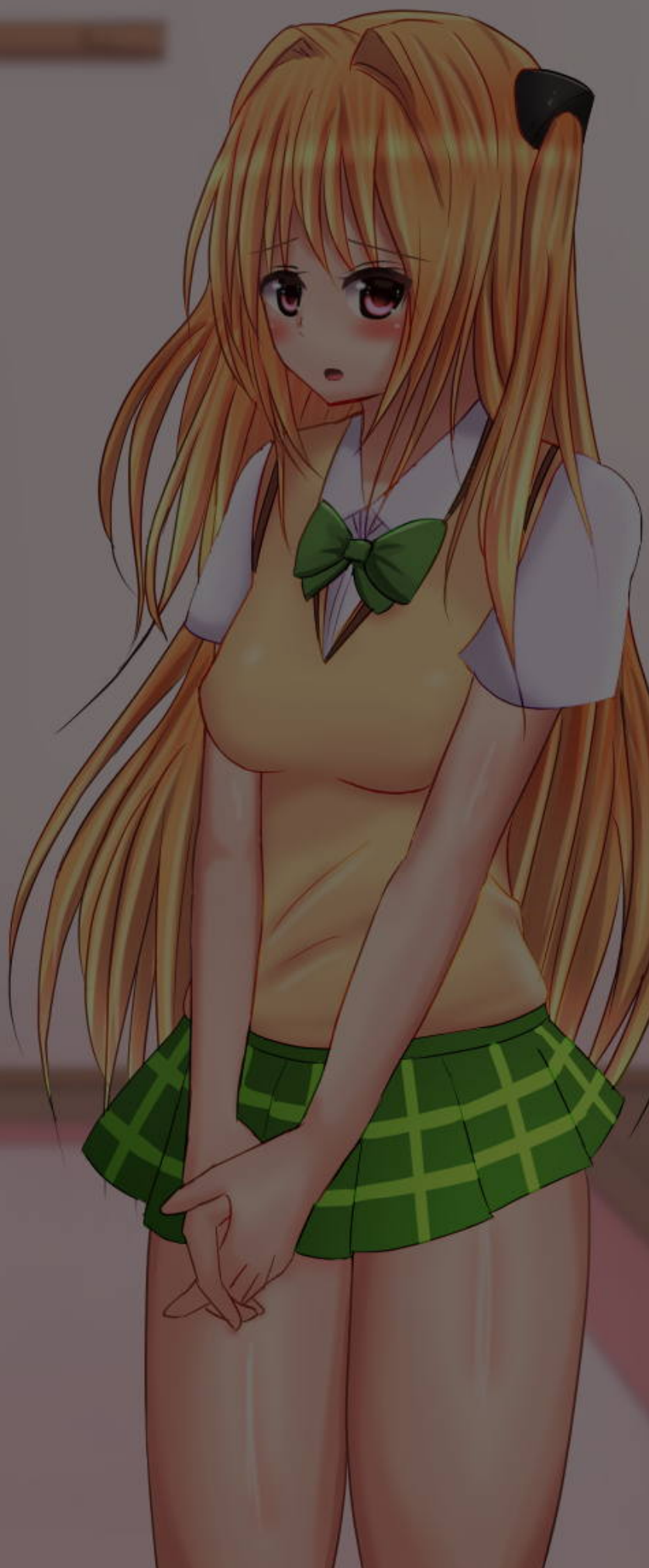
せめて簡単に畳んで……

あっ……



脱ぎ捨てられた衣類と一緒に置いてあったのは、
くしゃくしゃに丸められた一枚の下着だった。

ここは美柑の部屋なのだし、別にそういうことがあってもおかしくはない…
もちろん、私が意識するようなことも別にない…はずだったけど…



あ、美柑……美柑……



そのときの私は、少しどろかしていた。

はあああ、私、どっして「んな」として……
美柑、ごめんなさい……

自分の友達がいない間に、
その下着で自分を慰めるなんて

最低以外の何物でもない。

しかも、美柑を怒らせてしまったのも
元はと言えば私が原因なのに……

これじゃ、私が最初から
こうすることを狙っていたと
思われても不思議じゃない。

でも……

フチユ……

ツッ……

グッ……

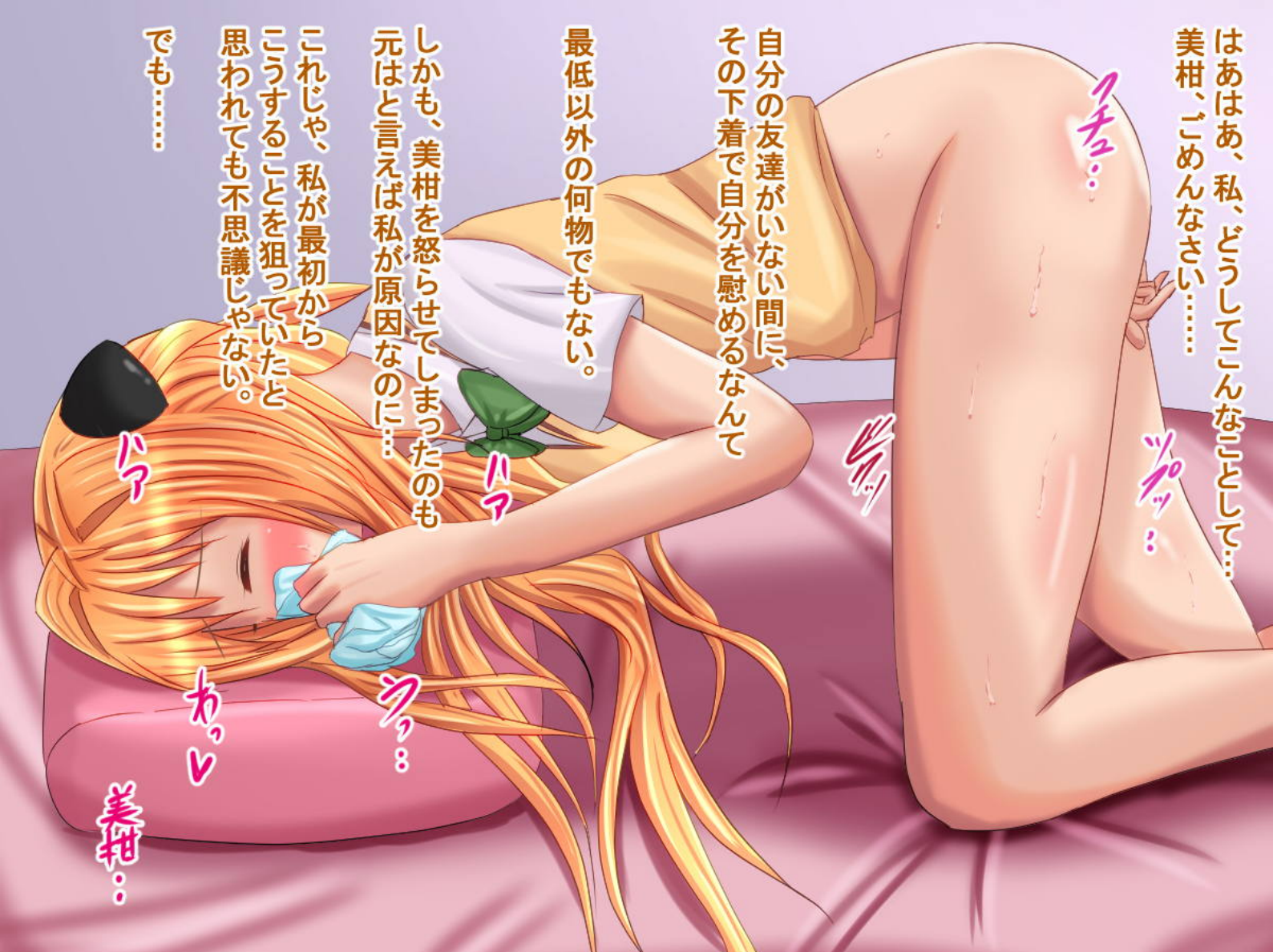
ハァ

フ……

わ、レ

ハァ

美柑……



美柑……美柑……

今までなんとか抑え込んできた美柑への想いが、この背徳感と一緒に溢れ出して止まらない。

クチュ……

ツッ……

クチュ……

ハア

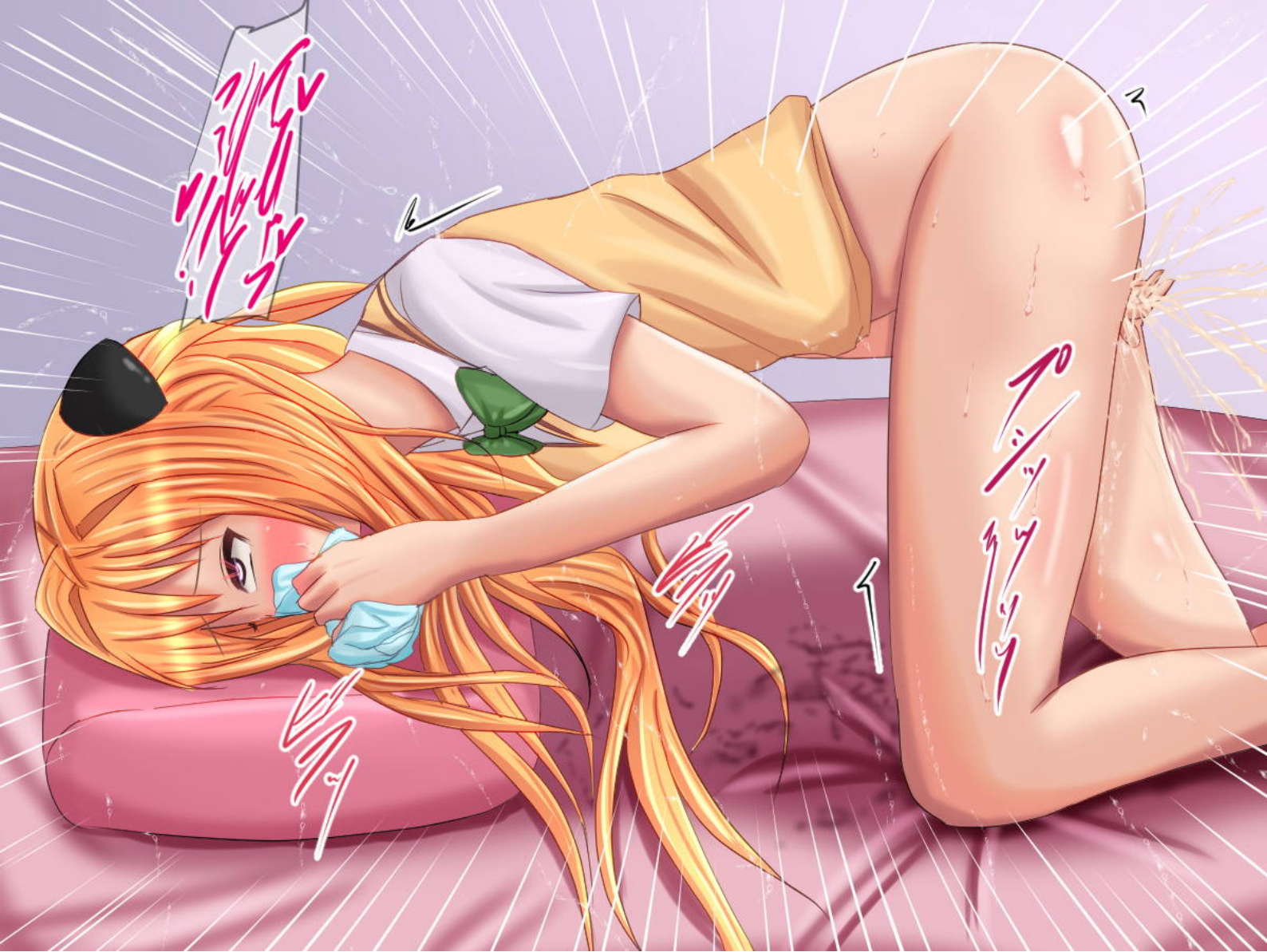
フ……

わ……

美柑……

頭の中いっぱい広がる美柑の香りで、私は完全におかしくなっていた。

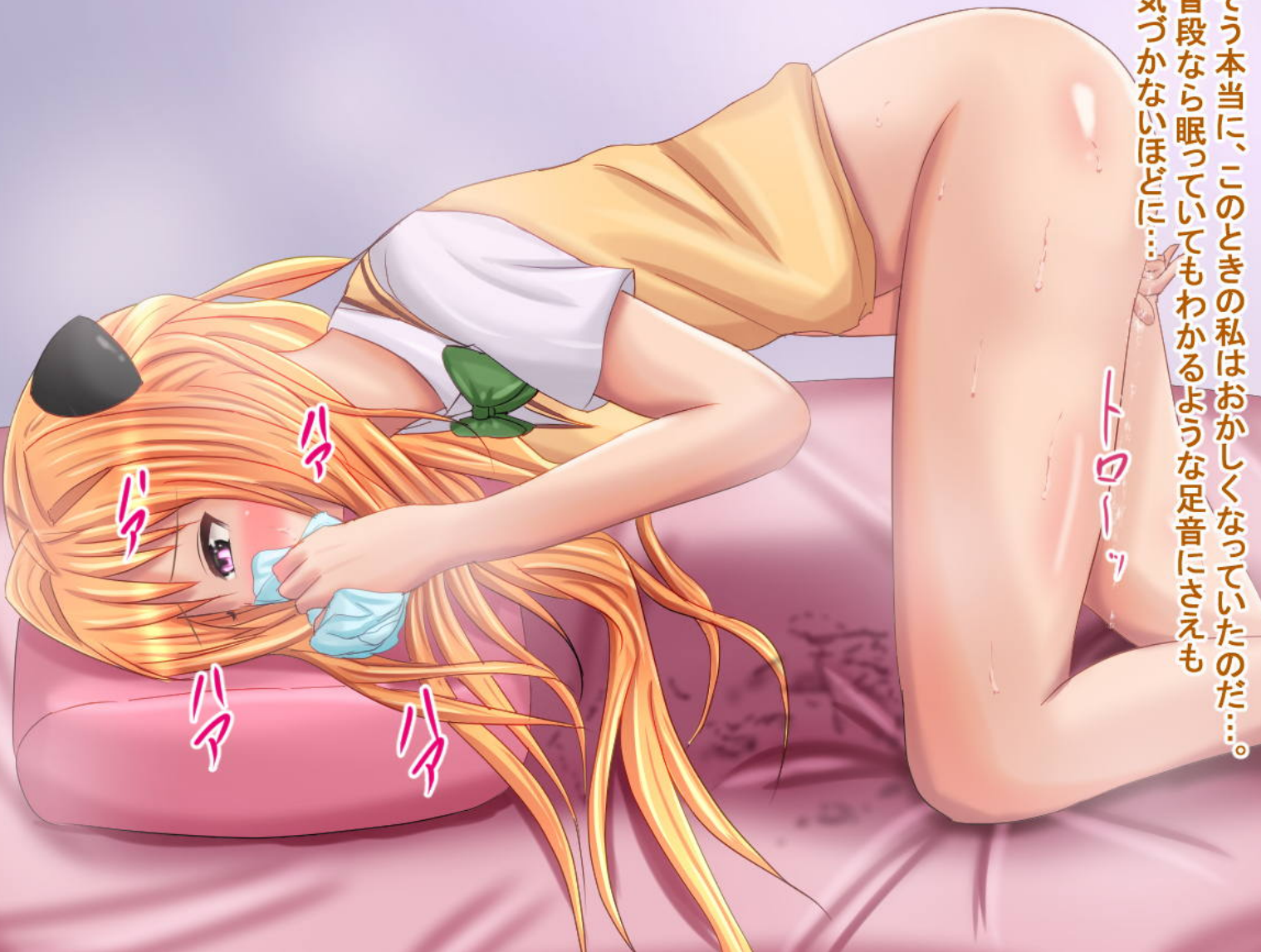




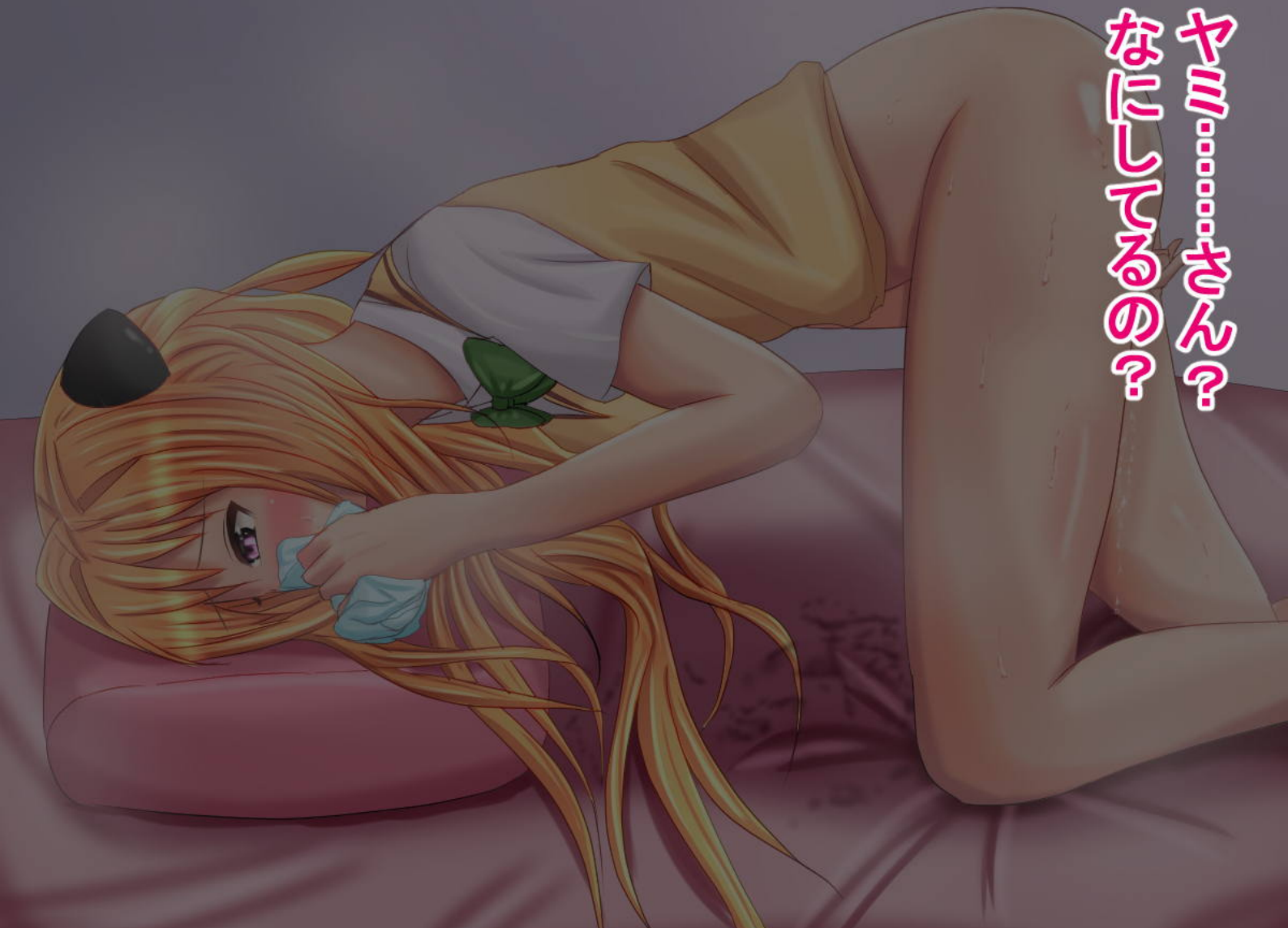
そう本当に、このときの私はおかしくなっていたのだ…。
普段なら眠っていてもわかるような足音にさえも
気づかないほどに……

トローッ

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ



ヤリ………せん？
なに？とるの？



ちびぶ、ぞるぞるいいかな？

私は昔のヤミさんのことを何も知らない。
けど、地球に来てからのヤミさんのことは、誰よりも知っている。

ヤミさんが自分のことを変えたいと思っていることも。
私のことを、エッチな目で見ていることも。

そして、そんな自分に負い目を感じていることも。
全部全部知っている。



だから私は、わざとヤミさんがその気持ちを発散できるように仕向けた。
脱いだ服をそのままにして、パンツも置いておいた。

わざとヤミさんを傷つけて、買い物に行くと行って家を出た。

今頃ヤミさんの心は、きっと私への想いと
倫理感でぐちゃぐちゃになっている。

私は、そんなヤミさんをもっと見たい。



そして、もつとぐぐちやぐちやになるヤミさんを見たい……。。

ヤミ………やみさ。

なにしてるの？

美……柑……どうして、「ニニ」？ 買い物に……行ったんじや……

うん、行ったよ。でも途中で財布忘れたのに気づいて戻ってきたの。
そしたらヤミさんの声が聞こえたからさ

そう……で、すか……



それよりヤミさんは何をしてるの？

それって、私のパンツだよね？

あの…これは、その……
(どうしたら…何も言葉が…)
ふうん…ヤミさんって、そういう趣味があったんだ

!? いえ違うん…です…



リトに散々えっちなことは嫌いとか言っておきながら

友達が留守の間に下着を舐め回して、
人のベッドでそういうことするなんて…

ヤミさんわかってる？ それ、変態って言うんだよ？

……はい



気持ち悪い……



終わった…終わってしまった、なにもかも……
震えが止まらない。私は、心のどこかで思っていた。

美柑なら……私の想う美柑なら、ひよっとすると私のこの気持ちも
受け入れてくれるんじゃないかと……

でも現実はこの通りだ。

初めて見る、道端に落ちているゴミを見るような冷たい目。

それが答えだった。もうここにはいられない……
結局私は、またあの暗い宇宙に……

ねえヤミさん



続き、しないの？

え？

だから続き。ヤミさんが今してたことの続き

え……いや……あの……それ……は

……見せて

でも美柑——

見せて

あ……う……



私はなにをしているんだろう。

美柑の下着でやってはならないことをして、軽蔑され…
見捨てられたのに、今は美柑に促されるままに服を脱ぎ、
こんな格好をするなんて…

ほらヤミさん。いつもしてるみたいにして見せてよ

……

どうして美柑は…私にこんなことを…？

指を恐る恐る秘部にあてる。

こんなことになって、体中の血は冷え切っているのに、

それでも彼女の姿を見ただけで、

この部分だけは確かな熱を持っていた。

美柑…その、本当にするんですか？

うん、早くして

最低なヤミさんのもっと最低なところ、ちゃんと見せて？



美柑が何を考えているのかわからない。

この惑星に来てたくさんさんの本を読んだが、そのどれにもこんなことは書いていなかった。

ねえヤミさん、さっきはもっとちゃんと指動かしてたよ？



ハア

フニッ

クニッ

クニッ

すみません…でも、恥ずかしくて……

ぶっ、友達のパンツでオナニーしちゃうこと以上に
恥ずかしいことなんてないよ

うっつ……

自然に涙がこぼれる。

もともと純粹で心優しい美柑と、兵器として生まれ
人としての道を外れ続けた自分が対等な関係になど
なれるはずがない。

そんなことは最初から分かっていたはずなのに……

あーあ、ヤミさん泣いちゃった。

ねえヤミさん、許してほしい？ ヤミさんのした最低なこと

……？ は、はい……



じゃあいつて？

え……？

私のパンツでオナニーしてごめんなさいって謝りながら、
上手にイケたら許してあげる

美…柑……？

はい、今から十秒以内にね？ 誤魔化したらダメだよ？

え…まっ

じゅーきゅー

あ、あっ……



私は彼女のカウントダウンが始まると同時に、夢中で股間をこすり上げた。

ニヤニヤと冷たく笑う美柑の視線に耐えながら、恥も外聞もなく、ただ猿のように自分の気持ちのいい部分を刺激し続ける。

本来自分を律するはずの理性や羞恥心とは裏腹に、快感は徐々に下腹部へと溜まっていき——

にー、いーち



ふーふー……

体中から色んな液体をまき散らしながら
ヤミさんは絶頂した。

あのクールなヤミさんが、
私の言うがままにアソコを「すって、
ビクビクと痙攣する。

上気した頬で……
捨てられた子犬みたいなきえた目で……
涙で潤んだ瞳で、私だけを見てる。

よくがんばったねヤミさん

はあはあ……これで、許してもらい

でも、ゼロって言うののほづが早かったから、やっぱり許さない

あ……そんな



また明日も、同じ時間に来てね？





美柑はそう言うと、

厄介な訪問者を追い払うかのように扉を閉めた。

私が帰るときにいつも見せてくれる、
どこか名残惜しそうな表情は一切ない。

美柑の考えていることがわからない。

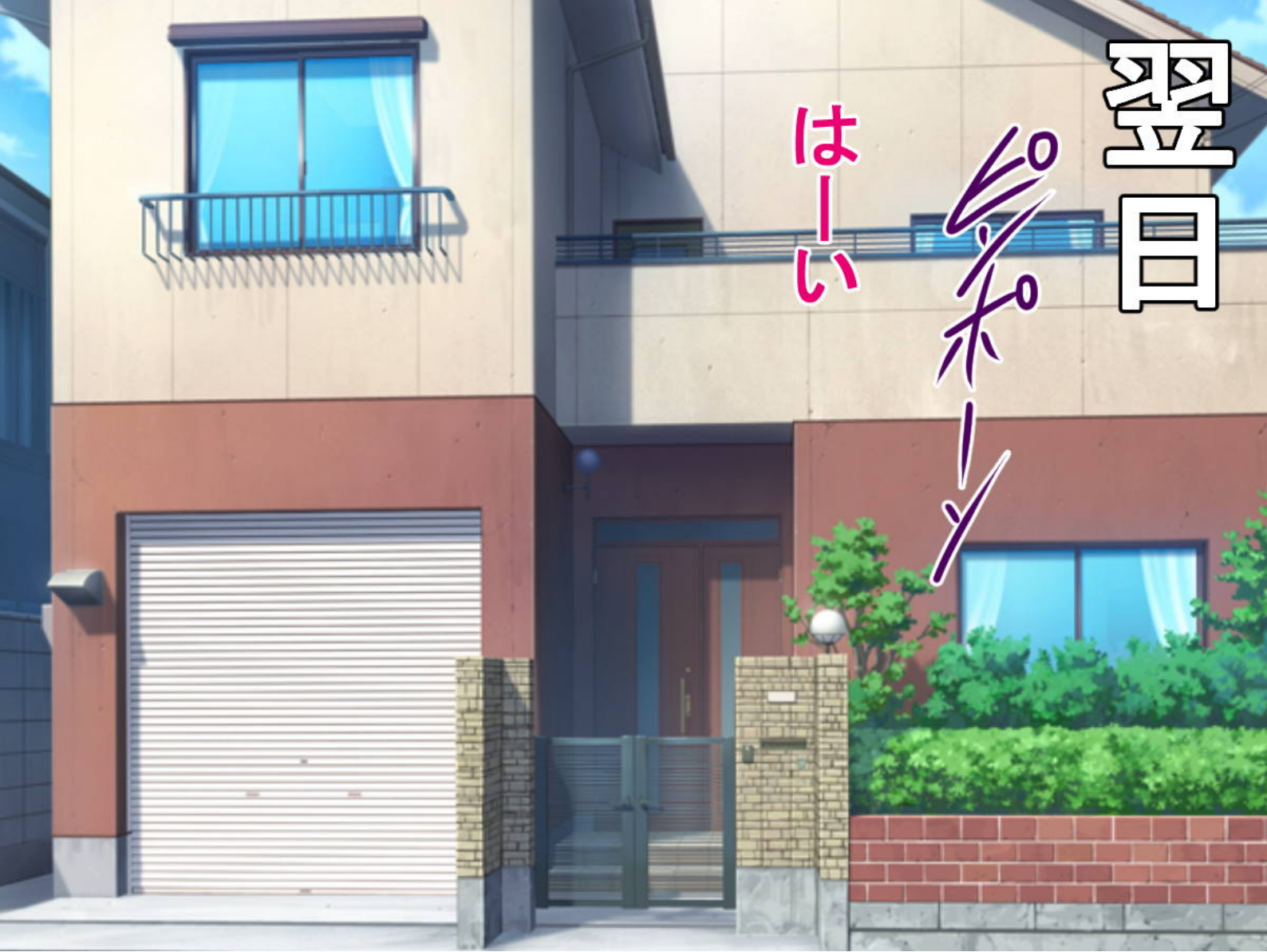
落ち込めばいいのか、後悔すればいいのか、
反省すればいいのか……。

しかしこんな状況になってもまだ、
美柑に明日も会うことができる。

そのことにだけは、安心してしまおう自分がいた。

翠日

はい



あの、美柑……来ました…

ああ、なんだヤミさんか。
本当に来たんだね、いらっしやい

……っ

どうしたの？ 上がりなよ

……はい



気まずい沈黙が流れる。

部屋に通され十分ほど経ったが、
美柑はただただ私の顔を眺めるだけで、何も話そうとはしない。



私は彼女の視線に耐えかねて顔を伏せ、
今にも涙が出そうなのを堪えながら、
その場にいるのがやっとだった。



ねえ、ヤミさん
私ね、今日はヤミさんに勉強を教えてもらいたいんだ。

勉強…ですか？ それはもちろん構いませんが…

不意に口を開いた美柑に面食らいながらも、
私はなんとかさそう返した。

なんの教科ですか？ 算数？ それとも理科とか

ううん、保健体育

保健体育……？



そうだよ
今日はね、性器と射精について勉強したの。
え？

でもやっぱり本じゃわからないから。
ヤミさんトランスでつくれるでしょ？

そ…それは…可能ですが……

じゃ、作って

でも……

何度も言わせないでよ





美柑の有無を言わさない剣幕に動揺し、
結局私はそのお願いを了承してしまった。

もちろん教養の一環として、

その…男性のアレについての知識は持っているし、

それはこの先思春期を迎えるであろう美柑にとっても大事なことだ。

だから、これは決してやましいことではない…

そう自分に言い聞かせながら、トランスを発動させる。

へえ、これが男の人のアレなんだ。
それにしてもトランスって本当に便利だね

あの、美柑…あまり触るのは……

ねえヤミさん、

これって本物と一緒になの？

えっと…内部の器官は

再現してありますので、ほぼ男性のそれと同じです

さすがに精子は作れないので、
射精は見かけだけになります……

ふんっ。



ふうん、ってことはヤミさんは
今私にオチンチンいじられて興奮してるんだ？

え…いや…あの、そんなことは…

だってこれ、構造は男の人のそれと
一緒なんですよ？

私の留守中にあんなことまでしておいて、
昨日の今日ですぐ発情するなんて
ヤミさんってやっぱり変態なんだね？

……………「めん…なさい

ニヤ
ニヤ

ク
ク



あー、ヤミさんまた泣きそうになってる
ヤミさんって意外と泣き虫だね。

でも、泣かなくてもいいよ？

私、ヤミさんが気持ち悪い変態さんだってことは
昨日のことで身に染みてるから。

ほら、変態のヤミさんは
こうされると気持ちいいんでしょう？

今日学校で習ったんだ。

オチンチンに刺激を
与えてあげると射精するって



ひぐつ…ちよつと待つ…美柑…

ダメだよヤミさん。腰引いたら。これは勉強なんだから。

ダメダメで変態などうしようもないヤミさんでも、私の勉強の手伝いくらいはできるってところを見せてよ

美柑、あつ…やつ、
本当に出ますから！

止めっ—





へえ、これが射精なんだ……
でも、精子は入ってないから本物とは違うのかな……

(ヤミさんの精液……)

はあはあはあ……

美柑……これで、勉強は
終わり……ですよね？

すみません、これ……思った以上に体力を……

(汗ばんだエッチな顔……本当に、苦しそう)

……「めんねヤミさん。

瞬きしててよく見えなかったから、
もう一回お願い

……え？

(もっと……見たい……)



待つてくださいます美柑！
ダメです！ 出したばかりで力が…それにくすぐったくて

あっ、ひぐっ……

ほらヤミさん、逃げないで！

美柑、本当にダメなんです！
許してください！

お願いですから！



シカ

シカ

シカ

シカ

シカ

シカ

シカ

ヤミさんはそう言いながら、まるでお店で駄々をこねる子のように
わんわん喚いて、私の手から少しでも逃れようと腰を振る。

だけど、いくら体を動かしても密着している私が邪魔で、
執拗にアソコを責める私の手から逃れることはできない。

見る人が見れば、まるでヤミさん自身が私の手に向かって
必死に腰を振り続けている。そんな滑稽な姿に見えたと思う。



馬鹿の一つ覚えみたいに腰を引けば、私はその分手のピストンを深くする。
横に動けば強く握って引き戻す。

動くことが無駄だとわかって、蝶のさなぎのように身を固めて耐えようとする
こともあったけど、そんなときは先っぽをぐりぐりと刺激してあげると
ビクンと跳ねてまた身をよじる。



そんなことを何度も何度も繰り返して、
ヤミさんは顔を汗や涙や鼻水でボロボロにしながら、
何度も何度もやめて、許してと繰り返した。

そして、その必死の懇願が限界を超えたとき――



それまでで一番大きく体を震わせながら、
ヤミさんは絶頂した。





それからしばらくヤミさんは放心状態のまま動かなかった。
目も虚ろで、私のほうを見てもいない。

そんな姿がたまらなく可愛くて、

私は思わず、倒れているヤミさんを助け起こして抱きしめた。

ヤミさんは何も言わなかったけど、少しだけ体を預けてくれた。



私の知っている美柑は、明るくて、優しくて、
暗い人生を送ってきた私に初めて光を与えてくれた太陽のような存在だった。

それはこんなことになった今も変わらない。



だけど、美柑が私のことをどう思っているのか…何を考えているのか、

こうなる前に少しだけわかりかけていた彼女の気持ちも、
今はまるでわからなくなっていた。

私たちの関係が変わってしまったあの日以降も、
美柑は毎日私を呼び出した。



私のしてしまったことへの罰とか、保健体育の勉強とか、
そんな建前もなくなり、彼女の家に着いた私は暗黙の了解のように服を脱ぎ、
能力を使って男性器を作る。

その後のことは美柑の気分次第だったが、結果的にすることはいつも変わらない。

ふふ、ヤミさん。

お尻の穴をいじるとこれが大きくなるって
本当だったんだね。



さっきあんなに出して、
もう出せない出せないって騒いでたのに、
ほら、こんなに大きくなってるよ？

これならもう一回くらいできるんじゃない？

アッ
アッ

アッ

アッ

美柑は、私が性器をいじられて困ったり、泣いたり、許しを請うのを楽しんでいるようだった。

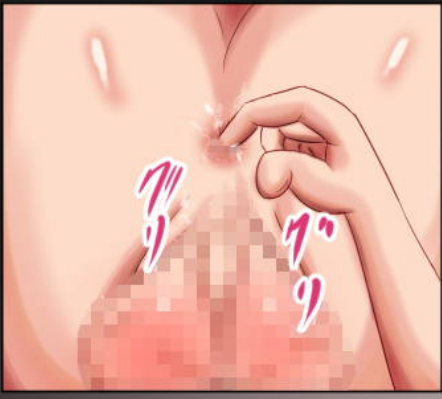
そしてその行為は徐々にエスカレートしていき、私ももはや本気で抵抗することとはせず、ほとんどされるがままとなっている。



しかしそれは、
抵抗を諦めたと言うよりは、
この関係を受け入れたと言ったほうが正しいのかもしれない。

こんな歪んだ形でも、
ただの暇つぶしのためのおもちゃとして扱われても、
美柑の中に、私が存在できるという事実が
なによりも大切だったから。

ムムム
どうかな〜？



あーあ、また出しちゃった。
でもお尻いじられてるヤミさん、可愛かったよ？

おいで？ 体洗ってあげるから……

意識が混濁するほどの度重なる射精……

私が本当に限界を迎えたときにだけ見せる
美柑の優しくも悲しそうな笑顔。

友達でも、出来の悪いおもちやを見つめる目でもないその意味を、
私はまだ理解できないでいた。





そんな生活が続いていたある日のことだった。

美柑はいつものように私を家に招き入れ、
私は複雑な面もちで服を脱ぎ、トランスを発動させる。

しかし、一通りの準備が終わった後も、
彼女は私のほうに歩み寄ろうとはせず、私を床に座らせて
いつか見た身も凍るような視線を私に向けた。

ヤミさん、なにか私に言うことがあるんじゃない？

……言うんですか？

あるでしょ、私に隠してるんです

すみません、私本当にわからなくて――

嘘つかないでよ

いえ、なんのことだか本当に……



昨日、リトとイチヤイチヤしてたんでしょ？

え……？

それは、その……不本意ながらその通りですが……

あのときは、またコーラで酔っぱらったセリーヌの花粉で……

……そんなの……関係ないよ



美柑はどうして怒っているのだろうか。

私が彼女の花粉をまた浴びて、
結城リトのところに行ったことは事実だ。

ただ、別にそのことを秘密にしていたわけではない。

私が結城リトと会うことで、美柑に不都合なことがあるとは思わなかっただけだ。

ひょっとして美柑は、

私のような存在が自分の兄に近づいたことに怒っているのだろうか

しかし、それならそれでこんな回りくどい言い方はしない気がする。
ただ一言、自分の兄に近づくなと言えればいいだけなのだから



わかりました、美柑…
私はもう結城リトには会いません…。

は？ 何言ってるの？

そんなことしたらリトが悲しむし、みんな変に思うでしょ？

はあ？

というかヤミさん、少し勘違いしてるみたいだね

…どうして「リト」でしようか？



私はね、ヤミさんがリトに会ったことに怒ってるんじゃないの。
ヤミさんのその節操のなさに怒ってるんだよ

節操のなさ……ですか？

私に隠れて私の下着でオナニーしたり、かと思ったら
私の知らないところでリトにすり寄って、犬みたいに尻尾振って

でもあれは、花粉の……



言い訳しないで

.....すみません

はあ、やっぱりヤミさんは変態だね



このチンチンがそうさせるのかな？
だったら、ちゃんと躡けてあげないと.....



え...??

ズズズ

ひっ…

美柑、やめっ…あぐっ

ほら、ヤミさん。

ダメだよ、これはヤミさんへの罰なんだから、逃げたりしたら

ひぐっ……

わっ
わっ
んぐっ

あはは、勃起してる。

やっぱりヤミさんは変態さんだね。

足で踏みつけられてもチンチン勃たせるなんて、
ほんと気持ち悪い。

そんなだから、リトのほうに…

ゲ
ン
ッ

ゲ
ン
ッ

(え、今何か…)

気抜いていいの？
ちゃんと金玉守らないと潰れちゃうよ？

あーあ、ヤミさん
勃起さえしなければ手のひらで全部覆って大事なチンチン
守れるのよね？

ヤミさんが変態だから
勃起チンポ丸出し。

ほら、イヤならちゃんとチンチン小さくしてよ。

触ってもらえれば誰でもいいんでしょ？ この変態！



美柑はそうして私のことを激しく罵倒しながら
何度も何度も私のアソコを踏みつけた。

美柑が怒った理由も、
さつきぼそりと言った言葉の意味も、何一つ分からない。

ただ、そんな困惑する思考とは裏腹に
美柑の足からもたらされるいつもと違う刺激は、
私のアソコを確実に刺激し、快感を高めていく。



変態！

友達の私に興奮して、置いてあったパンツでオナニーして、罵倒されても足で蹴られてもチンチン大きくして、精液ビュービュー射精して

そんな変態のヤミさんなんか、リトだって他の人だって相手にしないんだから！私だけだから！ヤミさんの「と、ちゃんと見てるのは！

イケ、イケ！ 私の足で、またいつちやえ！

っ!?





そうして、私はまた射精した。
美柑の言う通り、だらしなく無様に、
何度も何度も震えながら命のこもっていない精液を吐き出す。
そんな私を美柑はどこか悲し気な目で見つめ、
そして小さく口を開いた。

はあはあ……最低……
ほんとに……最低だよな……

美…柑……？

ねえヤミさん、知ってる？

ガッ

宇宙やララさんの星の話は知らないけど、
この国ではね、女の子の初めての相手には
とっても重要な意味があるんだよ？



意味ですか……？

そう、男の人は女の人の初めてに
責任を持たなきゃいけないの



………？

だからねヤミさん
私の初めて、ヤミさんにあげるから



責任、取って……？



え……？ え……？



あ、あの、なにをしているのですか……？

はあはあ、これ……
私の中に挿れるから……私、がんばるから……

落ち着いてください美柑！

そういうことはまだあなたには……それにこんな大きいの
挿れたりしたら……







あ……う……

くっ……ヤミさん……どうも……
気持ち、いい？

だん！

ハア
ハア……あ……

うそ……ほんと……に……

美柑、すぐ抜いてください……
ダメ、ですから……こんな

ううん、動くね

アッ……

そう言うと美柑はぎこちなく腰を上下させ、
苦しそうな顔を見せながら、
私のアソコをスリズリとこすり上げる。

こんなことはするべきじゃない。

そんなことはわかっているけれど、

自分にもたらされる今までにない快感と、
美柑と繋がれているということが相まって、

理性はほとんど失われていた。



ジグジグ

ジグジグ

ジグジグ

ジグジグ

はあはあ、どう、ヤミさん？

だんだん慣れて…んっ…きたよ……

ほら、ヤミさんもっとよく見て？

私たち、繋がってる…セックスしてる！

かっ
っ
っ
っ

こんなこと絶対リトには言えないよね？

私の処女膜ヤミさんに破られたなんて知ったら、
さすがのリトでも絶対ヤミさんに幻滅するもんね？

だから、私だけだよ、ヤミさん？

ハッ
ッ
ッ
ッ

ズ
ッ
ッ

ズ
ッ
ッ

ズ
ッ
ッ

ヤミさんのこと、ずっと見てられるのはもう私だけ！

ズ
ッ
ッ

あっ、んっ……美柑、美柑っ！

美柑の考えていることがわからない。ただ、もうそんなことはどうでもよくて…

美柑の高い体温や、ヌルヌルとしたアソコの感触。

カッ
ヤミヤミ

カッ
あん

それらすべてが快感となって私の脳を溶かしていく。

私のアソコはすでに限界まで膨張して、それでもなおこの快感を味わい続けたくて……

そして、それはいい——

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ



はあはあ……これで、ヤミさんはもう……私のだよ？

もう……絶対……放したりしないから……

美柑はそう言って肩で息をしながら私の目を見つめる。
そんな彼女の瞳を見て……私はこれまでであった色んな事を、
少しだけ理解した気がした。

ハア
ハア

ハア

ハア

ドロ……

そして私が理解したそれは、
私が、私自身の言葉で

きちんと答えなければならぬものだった。

美柑。そんなことしなくていいんです

え？

私の弱みを握ったり、こんなことをしたりしなくても、
私はあなたから離れたりしません。

あなたが私のことを望んでくれる限り、
私はあなたのそばに居続けます。

美柑、私はあなたのことが大好きです。



私の言葉に対する美柑の答えは無言だった。ただただ、私の体に身を預けて泣いていた。

結城リトやプリンセス…

多くの人に囲まれる中で、最年少でありながら一番しつかりしている美柑も、きつと好きでそうなったわけではない。

中身は年相応にわがままで、その…自分にとつての大切なものを、誰かに取られる前に、どうしても守りたかったのだと思う。

いつもいつも滅茶苦茶な人間たちと接していて、その愛情が地球人の普通とは少しずれてしまっただけなのだ。

でもそれは、あくまでこの惑星での話。

宇宙からやってきた、常識はずれの一人である私には、そんなことは些細な問題でしかない。

だから――

美柑、もう一回しませんか…？
今度は、ちゃんと…

うん…

ヤミさん、好き、好きだよ！

ごめんね、今まで…素直になれなくて…私怖かったの、ヤミさんはリトのことが好きだってわかってたから…

ヤミさん♡

ヤミさん♡

いつかきつと、私のことを置いて行っちゃうって…

そんなこと…ないですっ…

♡

確かに結城リトは、あっ…大切な…でも、私は…美柑のことが…

ジギギ

ジギギ

ジギギ



そうして私たちは、
お互いの気持ちを確認して、
何度も何度も深く愛し合った。

互いの体を強く抱きしめ、
体液を交換し、私の愛を美柑の中に注ぎ込む。

何度も何度も体を震わせ、
のけぞりそうになる度、私の体にしがみついてくる美柑を
私も強く押さえこんだ。



あゝ

ハァ
わ

ハァ

ジギ

ジギ

ジギ



この日の一番長い射精が終わり、
私と美柑はぐったりとベッドに倒れ込む。

今までとは比べ物にならない疲労感があったけれど、
心は前よりずっとずっと満たされていた。

地球人である美柑と、兵器としてつくられた私…

どこまで一緒にいらられるかはわからないけれど、
できればこれからもずっと…こんな風に…

はい

ピンホーン

あ、ヤミさん。いらいじゃー…

美柑、

あの、今日新しいたい焼き屋ができていたのを見つけたんです。

もし時間があるならこれから一緒に行きませんか？

うんいいよ。でもヤミさん、その前に――



昨日、リトと裸で学校のロッカールームに隠れてたって本当？

え、あ、あの……あれはですね、たまたま結城リトと会った時にプリンセスの発明品が暴走して……

へえ、そうなんだ



それじゃ、早く服脱いで？

いや…あの、それは……



はい、ヤミさん。

二度とそんなえっちなことができないように、今日は徹底的に搾り取るからね♪

待ってください美柑！

なんですかその変な道具？！

これを使うと、何回でも射精できるんだって。今日は泣いても絶対許さないから

あ……あ……

私の望む美柑との静かな日々はもう少し先の話になりそうです。

FIN